

これからの長野県教育を考える有識者懇談会（第4回）  
（令和4年9月14日）

■これからの長野県教育を考える有識者懇談会（第4回）

日時：令和4年9月14日（月） 午前10時～午後12時

場所：県庁議会棟第1特別会議室 WEB（ZOOM）併用

## 1 開 会

上平企画幹

ただいまから第4回「これからの長野県教育を考える有識者懇談会」を開催します。

本日は、おおむね12時を目途とさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

## 2 教育長あいさつ

上平企画幹

開会に当たり、長野県教育委員会教育長、内堀繁利から挨拶を申し上げます。

内堀教育長

皆さん、こんにちは。台風などの影響もあり、蒸し暑い日が続いておりますが、皆様には体調など崩されないようお願い申し上げます。

さて、本日は第4回の「これからの長野県教育を考える有識者懇談会」を開催しましたところ、村松座長様をはじめ、構成員の皆様には、御多用中にもかかわらず御出席を賜り、誠にありがとうございます。

前回、7月に開催した懇談会では、基本理念や計画構成の在り方などについて、皆様から御意見やアイデアなどを頂戴したところであります。

本日は、次期長野県教育振興基本計画の全体構成やその内容、指標の在り方等について御意見を賜りたいと考えておるところです。具体的には、長野県教育を取り巻く情勢、課題、これからの方向性、長野県教育が目指す姿、実現するための重点政策など、これまでに皆様から頂戴した御意見と、それ以外にも市町村教育委員会や学校関係者から頂戴しております御意見を反映し、事務局として整理させていただいたものを今日は提示したいと考えております。

また、「Well-being」や「探究」を中心に据えた計画を策定していくに当たり、最近各方面で言われているようなWell-being指標の例などを挙げながら、指標としてどういうものがあるのか、どういう方向性があるのかという議論もさせていただければと考えているところであります。

いずれにしても、今回も自由闊達で忌憚のない御議論をしていただくことをお願い申し上げます。冒頭の挨拶といたします。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

これからの長野県教育を考える有識者懇談会（第4回）  
（令和4年9月14日）

上平企画幹

本日、北條様はウェブ参加、大室様、高見澤様、西片様は、所用のため欠席との御連絡をいただいております。

続きまして、本日の配付資料の確認をさせていただきます。

まず、お手元に、次第、名簿、座席表。

資料1としまして「次期長野県教育振興基本計画の構成等」。

資料2としまして「長野県の教育をめぐる情勢・目指す姿・重点政策等」。

資料3としまして「次期長野県教育振興基本計画の成果指標の在り方」。

資料4としまして「令和4年度『長野県教育委員会の事務の管理及び執行状況の点検及び評価』報告書」。

資料5としまして「これからの長野県教育を考える有識者懇談会等の意見まとめ」。

それから、資料番号はありませんが「第4回長野県総合計画審議会（次期総合5か年計画について）」、「第3回これからの長野県教育を考える有識者懇談会議事録」となります。

以上でございます。よろしいでしょうか。

それでは、議事に移りたいと思います。

会議の座長は、前回に引き続き村松様にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

上平企画幹

それでは、村松座長、どうぞよろしくお願いたします。

### 3 会議事項

#### (1) 事務局説明

- ・次期長野県教育振興基本計画の構成等
- ・長野県の教育をめぐる情勢・目指す姿・重点政策等
- ・次期長野県教育振興基本計画の成果指標の在り方
- ・R4年度「長野県教育委員会の事務の管理及び執行状況の点検及び評価」
- ・これからの長野県教育を考える有識者懇談会等の意見まとめ

#### (2) 意見交換

村松座長

それではよろしくお願いたします。

先ほどの内堀教育長の話にもありましたが、いよいよまとめ、最後のゴールが見えてまいりました。いい形になりますように、ぜひ活発な御議論をよろしくお願いたします。

早速、議事に入りたいと思います。

まず、意見交換に入る前に、資料1「次期教育振興基本計画の構成等」及び資料2「長野県の教育をめぐる情勢・目指す姿・重点政策等」を事務局から御説明をいただけますでしょうか。お願いたします。

松本教育政策課長

教育政策課長の松本です。おはようございます。着座で説明させていただきます。よろしくお願いたします。

それでは、資料1と資料2について説明させていただきます。

今回の懇談会では、先日、事前に皆様から意見交換のお時間をいただきまして、本当にありがとうございました。その際、提示させていただいた資料から、皆様の御意見を反映できるところは反映させて、一部修正したものを本日提示させていただいております。

本日御意見をいただいた上で、10月下旬をめどに開催を予定している第5回目、これで最終を考えておりますが、有識者懇談会で骨子の案を提出させていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。

それでは、資料1「次期長野県教育振興基本計画の構成等」についてお願いたします。こちらは事前の意見交換で御説明した内容と特に変わっていませんが、確認という意味で御説明申し上げます。

現計画は6編から成る構成となっておりますが、次期計画では、長野県をめぐる情勢、目指すべき姿、重点政策、施策体系、成果指標といった計画の核となる部分のみをコンパクトにまとめたものとして取りまとめ、具体的な事業、成果指標の点検評価、今後の取組の方向性等は、毎年の実施プランとしてまとめ、常に最新の情報・状況を提示させていただき、計画の実効性を担保していきたいと考えております。

また、学校現場や県民の皆様に関後の5年間の長野県教育の理念、方向性を共有しやすくするため、周知用のパンフレットを作成していきたいと考えております。

資料1については以上です。

次に、資料2をお願いします。「長野県教育をめぐる情勢・目指すべき姿・重点政策等」についてです。

初めに、長野県教育をめぐる情勢についてです。こちらは若干皆様からの御意見の中に、全国の状況はこういったことだけれども、長野県が特筆すべき状況をもう少しまとめられたほうがいいんじゃないかという御意見をいただきましたので、まだ足りないのですが、一旦、入れられるものは入れさせていただいたような状況でございます。

人口減少、少子高齢化の急速な進行は全国的な傾向ではありますが、特に中山間地が多く、また、小規模町村が数多く存在する本県においては、学校の配置や教員不足、学校間連携の在り方も大きく変容していくことが予想されます。こちらに具体的な数字も示させていただきました。

また、二つ目の〇はVUCAの時代ということで、先行き不透明で将来の予測が困難な時代を生き抜き、新しい価値を創造していかなければいけない厳しい時代が到来しているということで、どのような状況にあっても、自ら考え、行動する力が必要とされています。また、発達障がいや特異な才能のある子ども、不登校児童生徒は年々増加しており、これらの状況を踏まえると、これからは多様性を理解し、共生していく中で、外部人材等を活用しながら多様な学びの機会を創出していくことが大事な視点と考えています。

また、デジタル化の急速な進展ということで、1人1台端末は新型コロナウイルスがもたらした大きな変化の一つであると思いますが、いつでもどこでも誰とでも学べる環境が整いました。ただ、この環境を子どもたちの学びに生かしていくことが重要であります。

ということで、めぐる情勢を長野県の状態も数値的に入れられるところはここに整理させていただきました。

また、二つ目のところですが、本県の先人たちが守り、育んできた学びの歴史・風土といたったものを大切にしていかなければいけないということで、知・徳・体を一体的にバランスよく育成する「全人教育」、それから、伊那小で始まった「自ら学ぶテーマを決める学習」、これは現在の探究的な学びにつながっております。また、江戸時代では寺子屋数が日本で一番というような県民の学ぶ意欲の高さといったものが、これまで私たちの長野県の中で脈々と受け継がれてきたものです。信州教育が大切にしてきた子ども主体の学びや風土をしっかりと次の世代に引き継いでいく役割もあると考えています。

こういった情勢、長野県の学びの歴史・風土といたったものを踏まえ、変化に富んだ時代、予測不可能な時代の中で、子ども主体の学びに立ち返り、今こそ未来を創造する力を育む長野県教育のアップデートをしていく必要があるということで、その方向性として記載の四つを提示させていただいたところです。

一つ目は「幸せや喜びを実感するプロセスを重視する学習観・評価観へ一層転換」、二つ目が「一律・一斉・一方向型の教育からの脱却」、三つ目が「多様な他者と『対話』『協働』し学びを深める環境づくり」、四つ目が「デジタル化による新たな学びの可能性への挑戦」という視点です。

そのためには、これまでの学校や教員を再定義する必要があると考えます。例えば、学校はこれまで勉強する場所がメインだったものが、これからは大人も子どもも学び合う場所であるとか、地域や民間の力を活用する地域の拠点と変化していくなど、前提が変わることで取り組むべき内容も変わってくることを意識していかなければいけないと考えます。

ここは大変重要なところと考えますし、事前の意見交換の中でも、大事なので論点にすべきというお話もありましたので、本日のこの場で議論いただきたいところです。

資料2の裏面をお願いします。長野県教育をめぐる情勢や大切に育んできたものを踏まえ、今後の長野県教育の目指すべき姿ということで、「個人と社会のWell-beingの実現」ということで一つにまとめさせていただきました。

それを実現するための副題的なものを、A案、B案、C案と示させていただいております。これも、先日の意見交換の中で皆様から様々御意見をいただいておりますが、ここで改めて御意見をいただければと考えております。

この目指すべき姿を実現するために必要な資質を育む心、それがすなわち探究心であると考えます。そのため、今後5年間で取り組む政策は何か、その四つの柱を一番下のところに記載させていただきました。

高校改革や学校への分権推進、教職員の資質向上などを目指す「一人ひとりが自分にとっての『Well-being』が実現できる学校をつくる」という柱が一つです。

それから、多様な認知特性に応じた学びの環境整備や学校に行きづらい子どもへの支援など、「一人の子どもも取り残されない『多様性を包み込む』学びの環境をつくる」という二つ目の柱。

そして、多様な人材の学校参画やリカレント教育の推進など、「生涯にわたり誰もが学び合える地域の拠点をつくる」という三つ目の柱。

最後の柱は、「文化・スポーツに身近に触れられる環境を整え、共感と交流が生まれる

機会を充実する」という柱です。

こちらについては、事前の意見交換の際、十分に時間が取れなかったのを私自身、反省しているところです。本日は具体的な取組等に関して御提案などをいただけたら大変幸いです。

資料1と2の説明は以上です。よろしくお願いいたします。

村松座長

御説明ありがとうございました。今、事務局から御説明いただいた順に従い、御意見をいただければと思います。

なお、本日なるべくたくさんの御意見をいただけますように、各発言をなるべく簡潔にまとめていただければと思います。

では、最初に資料1の構成でございます。言われたように、かなりコンパクトにまとめていただき、具体的なものは実施プランに移行していくということです。それから、学校現場や県民の皆様への広報のパンフレットを別途作成するという方向で御提案いただいております。

これにつきまして、ぜひ御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、学校のお立場から安藤様、いかがでしょうか。

安藤構成員

安藤と申します。よろしくお願いいたします。

私は、思い切ってこういう形で、まずは基本計画そのものを受け止めてもらいやすい考え方でつくる。その上で、具体的なものを一度に学校へ示さずに、順次にお示ししていくような形は、一番よろしいかと思っております。

村松座長

ありがとうございました。

学校の外から見たお立場でマキナリー様、いかがでしょうか。

マキナリー構成員

私も大変いいと思えました。特に、実施プランを年度ごとに作成するところがいいと思っています。毎年見直していき、最終的なゴールに近づくように段階的に行くことはとてもいいと思います。

それから、周知パンフレットですが、つくことはみんな割と一生懸命になるのですが、そのパンフレットを誰に向けてどう浸透させるか、そこまでしっかりと計画をしておく必要があると思います。特に、学校の先生方には、本当にいい環境を整えて、一丸になってもらうことが、今回のこの5か年計画を成功させるキーになると思います。

ですから、ぜひパンフレットはバイブルみたいな感じで、みんなが立ち返れるようなものにしていただきたいと思っております。例えば、研修会で基本理念を読み上げるとか、少し日本っぽいですが、そのくらいみんなが心をつなげるものになってほしいと感じます。

よろしくお願いいたします。

村松座長

ありがとうございました。まず一つ目が、毎年見直すという、PDCAのサイクルを回していくという点と、もう一点として、パンフレットは非常に大事な点を御指摘いただきました。誰に向けてなのか、そしてそれをパンフレットにどう性格づけて活用していくのか、これは今後のパンフレット作成の上で非常に大事な視点を御指摘いただいたと思います。ぜひこの辺は御検討いただければと思います。

そのほか、関連したところでも結構です。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

そうしましたら、資料1の構成等につきましては、この御提案の方向で、また先ほど御意見をいただいたような形で、パンフレットの構成・作成等を十分御検討いただくということで進めていただければと思います。

では、構成等はこの形で行きたいと思います。

続きまして、今度は資料2でございます。まずは前半の流れ、情勢から今後の方向性と来ております。再定義は後ほど時間を取って、ぜひ多様な御意見をいただきたいと思いません。

最初に、この辺の情勢分析から今後の方向性というところで、話の流れに矛盾点や抜け落ちている点等はないでしょうか。ぜひ御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

小金様、高校のお立場からこの辺を見ていただいたところでどうでしょうか。

小金構成員

失礼します。

本当にいろいろなところを取り入れていただき、ありがとうございました。具体的な数なども入って、大変分かりやすく変わったと思っています。

感じたところを上から行くとすると、一番上の「激変する社会構造や子どもを取りまく環境」の一つ目の急速な進行という部分で、中山間地域の多い長野県ということですが、悪いことばかりではなく、都市部にはない環境を生かした教育を推進できるという、いいところもあると思っています。

それから、VUCAのところですが、「東日本台風による」という被災のことも出ていました。ここで子どもが考える防災教育などもあったらいいのかなど。特に、最近、松本深志のほうで学校の中に食料をためるとか、生徒自らがどんな防災教育をしたらいいかを考え始めたりしているので、子ども主体のルールメイキングというようなところも入るといいと思いました。

あと、多様性の時代で、私どもとすれば、一番じーんと来るところが、「学校の役割の肥大化・丸抱え状態、教職員の疲弊、教員志願者の減少」というこの辺りです。全くそうだと思っていて、学校は今、専門家ではないにもかかわらず福祉や生徒・保護者共にカウンセリングなどを担ってしまっているところがあって、それによってかなり疲弊している部分があるので、本当に専門家に外から入ってきていただけると一番ありがたいと思っています。

じゃあ教員はどんな役割をすべきかというのは、また再定義のところでお話しできればいいなと思います。

あとは、今後の方向性のところの一番下の「デジタル化による……」という教育DXの部分です。これはあくまでも希望ですが、全ての学校にICT支援員が配置されるといいと思います。

もう一つ、今後の方向性の中に加えていただくのかどうか分からないのですが、ジェンダーバイアスの排除みたいなことも入れていただくとうれしいです。最近、文理選択の部分で女子に関してのバイアスがあったのですが、単に文理選択の問題だけではなく、小さなときから育ってくる中で、まだジェンダーバイアスがあるような気がしています。

特に、その地方ごとで全く違うなど思うのは、県内を東西南北いろいろ動かしてもらいましたが、勤務の中で感じた地方もありましたので、そんなこともあるといいなと思います。

以上です。

村松座長

ありがとうございます。最初にいただいたのは、中山間地の良さということで、情勢のところでも厳しい面だけではなく、プラス面も明記してはどうかという御提案かと受け取りました。

それから、教員の専門性のお話と、教育DXについては、ICT支援員というのは、要はDXを支える環境というか、支援体制の充実という形でしょうか。こういった視点が必要ということでした。

最後にいただきましたジェンダーバイアスの話は、「多様性の時代」の中に含まれるお話かと感じたところであります。

引き続きいかがでしょうか。

小学校の立場から松谷様、いかがでしょうか。

松谷構成員

お願いします。

まず読ませていただいて思ったことは、とても分かりやすく、すーっと胸に落ちてきました。今、学校で先生方に話していることがここに書かれていることとほぼ同じ内容で、これが周知されることはとてもありがたいことだと思っております。

周知に関して、固有名詞や子ども主体の修学旅行とか割と具体的に書かれているのですが、その具体が必要かどうかだけ検討いただきたいと思います。もっといろいろなものがあるのではないかと思いますので、検討をお願いしたいと思います。

以上です。

村松座長

ありがとうございます。非常に分かりやすいと御評価いただきました。

それと固有の名前が出ているところの検討というところでした。

そのほかにいかがでしょうか。

続きまして、西森様、いかがでしょうか。

西森構成員

西森です。

資料2のほうも一緒にお話しさせていただいてもよろしいですか。

村松座長

後のほうというのは、「Well-being」のほうですか。

西森構成員

長野県教育の目指す姿も一緒に関連してくるのですが。

村松座長

できれば情勢と方向性でまとめていただいて、また後半は再度時間を取らせていただきますので。

西森構成員

分かりました。

私は今後の方向性にぜひ加えてもらいたいものがありまして、それが長野県教育が目指す姿のところへとても関係しているのでお話しさせていただくのですが、先日、これを資料として送っていただいて、はぐルッポに来る不登校の子どもたちや保護者の方にも見てもらいました。

下へ行ってしまうのですが、「とことんきわめる」とか、「とことん追究できる」「出る杭も」というその辺りからとても意見がありました。こういう言葉を聞くと、もう脅迫されているように感じるし、追い立てられる気がするという保護者もいました。

また、あるお母さんは、「長野県の教育をめぐる情勢などを読んでみると、これは学校へ行っても勉強ができる子どもたちのものですね」とおっしゃる方もいました。

確かに、はぐルッポに苦しくて来る子どもたちを見ていると、子どもたちがこれを見たらすごく悲しくなると思うなと感じました。はぐルッポには、自分が好きなことも分からない状態で来るお子さんもいるし、中には、生きている価値がないと思って来るお子さんもいます。そういう子どもたちを見ていると、やはり私は子どもの権利条約から立ち上がる、これを基本に据えた教育であることが不可欠ではないかと感じています。

ですから、今後の方向性のところには、第一に子どもの権利条約を保障する教育ということが入ってもいいぐらいだと感じています。2016年に教育機会確保法が制定されましたけれども、学校の中ではそんなに浸透しているわけでもなく、知らない先生までいるという話も聞きました。

また、来年の4月からは、こども基本法が実際に公布されます。その中で、こども基本法は子どもの権利条約を基本とするものなので、そのこども基本法にのっとった教育を長野県でも一つ出しておくことが必要ではないかと思います。

それと、最近のニュースでお聞きになったかと思いますが、障害者の権利に関する条約について、国連の障害者権利委員会は9日、8月に実施した日本政府への審査を踏まえ、政策の改善点について勧告を発表したニュースがありました。障がい者の方が実際にスイ



スに行かれて訴えたのですが、それも同じで、やはり子どもの権利を保障するという教育を一筋ここに入れたほうがいいと思いますし、目指す姿のA案、B案、C案よりも、これ一本でいいぐらいだと私は思っています。

村松座長

ありがとうございました。前半にいただきましたA案、B案、C案の話はまたこの後に時間を取ってやりますので、再度そこで取り上げさせていただきたいと思います。

今、御提示いただきました子どもの権利の話ですが、多様性の部分なども密接に関わってくる場所ですので、どういう形で入れるのかは少し検討が必要だと思いますが、大事な視点をいただいたと思います。

それでは、また違ったお立場から御意見をいただければと思います。ウェブのほうで北條様は取れますでしょうか。研究者のお立場からこの情勢・方向性等の分析をお話しいただければと思いますのでお願いいたします。

北條構成員

今日もすみませんが、ウェブからの参加にさせていただきました。よろしく願いいたします。

この資料2の表面の部分で言いますと、私も今日ここまで出てきていた御意見に近いのですが、1点だけ、取り巻く環境の中の多様性のところについて、ここまでもジェンダーバイアスの話や先ほどもお話がありましたけれども、本質的ではないかもしれませんが、ここの書きぶりが、多様性の背景として不登校が増えているとか、学校の役割が肥大化している、教職員が疲弊しているなど、非常にネガティブに見えます。実際の多様性の時代というのは、そういうものをネガティブに捉えるのではなく、様々な環境や立場、状況に置かれている、あるいは様々な特徴を持った子どもたちがいるという、それ自体をポジティブに捉えて、学校という場所で生活をしていくという位置づけになると思います。

ですから、この多様性の時代のところをもう少しポジティブに表現できないかと。恐らくそれが子どもたちが目にしたときにも悲しくならないといえますか、それでいいんだと認められるような前提で計画が表現されているほうが好ましいのではないかと、この部分については見ておりました。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。先ほどの話に続いて重要な御指摘をいただきました。多様性の部分で、様々な子どもたちやいろいろな子どもたちを包み込んでというのは、多分Well-beingの話にもつながってくる大事なところだと思います。この辺をまた少し検討を進めていきたいと思います。

もうお一方、荒井様はこの情勢・方向性等いかがでしょうか。

荒井構成員

信州大学の荒井でございます。

「情勢」部分に関してですが、「現状の課題」と「あるべき方向性」の両方が混在しています。「現状」に関するデータとして、人口減少等に伴い学校数が減っていること、不登校児童生徒の数や特別な支援を必要とする児童生徒の対象者数が増加しているものが現在掲載されていますが、どのデータを記載すべきか、また、「あるべき方向性」に焦点を絞って記載したほうがいいのか統一された方がいいのではないかと思います。

もう一点、気になっている部分が、長野県の教育等が大切にしてきたものに対する記載と今後の方向性の記載がありますが、課題と現状を引き起こしている課題認識の記述が乏しい印象を持ちました。昨今「アップデート」という言葉はよく使われますが、やはり何をどのようにアップデートしていく必要があるのかを明確化した方がいいと思います。以上です。

村松座長

ありがとうございました。今のはかなり資料の根本的な構成に関わる話だったと思います。最初でもいただいておりました良さの部分と併せて、課題だけでクローズアップするのか、先ほどネガティブというお話もありましたけれども、そこら辺を組み合わせていくのかということ。

それから、構成そのものの、今のように情勢、そして長野県の信州教育の話、今後の方向性という形で、こういう構成で行くのか、あるいはもう少し増加させて、一つの課題や情勢に対してどういう方向性かと、対応づけるようなやり方も考えられると思います。

この辺を併せてもう少し御意見をいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

岩瀬様はいかがでしょう。

岩瀬構成員

よろしくお願いします。

大きい話として、今回の振興計画が学校や自治体、一人ひとりの教員が大胆なチャレンジができるよう背中を押すものになればいいと考えています。長野県に小規模学校や自治体があることは強みでもあると考えています。本来ならその規模感だと大胆なチャレンジしやすいはずなので、その背中を押せるものがあるといいなと思います。

学校現場や学校教育は慣性の法則が働きやすく、現状のままでいようとする力が働きやすいので、今回の計画の文言を受け入れやすくすればするほど、「現状でいい」という解釈をして、変えないという選択が生まれやすいのではないかと思います。そういう意味で、裏面にも書いてありますが、どういう言葉を置くとみんなが新しいチャレンジをしようとなっていくのかは検討したいと考えています。

その上で、方向性のところで「『探究』する楽しさ」ということが学習観・評価観のところで書かれていて、ここは結構重要だと考えています。。従来の知識をため込んでスキルを取得する学習観から、探究、それに伴う対話から自分たちで知識を構成していく、そのプロセスの中で自分の有能さに気づいていくという学習観への転換をうたっていると読んでいます。そこで大切なのは長野県として「探究」という言葉をどう定義するのか、です。

探究という言葉はパスワード化しているので、人によって思い浮かべることは全然違う

はずです。幼児期の自分たちで「～したい」という情熱から対象に関わって世界を拡張していく探索期のようなものをイメージする人もいれば、高校の自分でテーマや問いを決めてプロセスに従って探究していく大学のレポートのようなイメージの人もいて、内実全然違うはずです。あらためて長野県はこういう探究を考えているということが描けるのかどうかは、よく検討したいところかと思えます。

あわせて、評価の転換も裏表だと思えます。ただ、「非認知能力を評価」と書いてあるのが少し気になっていて、非認知能力を評価するとはつまりどういうことなのか。

一時期、日本の学校教育も意欲・関心・態度を評価しようということで、そこでの課題や問題が現場で起きたと理解しています。これも同じような危険性をはらんでいると思いますので、ここでこう書いていいのかは検討の余地があります。

もう一点は、結局現場の教員が変わらなければ学校教育は変わらないという点です。先日、中教審から教員の研修についての中間まとめが出ましたが、その中で研修観の転換が指摘されています。今までの研修観からの転換です。子どもたちに協働的な学びや個別最適な学び、探究の学びを求めるなら、教員の学びも子どもの学びも入れ子構造なので、教員の学び自体が変わらないと子どもの学びは変わりようがないではそういう研修観を大胆に転換することも、今後の方向性としては重要ではないかと思いました。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。最初に出てきましたが、先生方の背中を押すということで、今回は今、御指摘いただいたところを一番大事にしたいと思います。先生方の背中が押されて変わっていかないと、実際に教育は変わっていかないわけですので、この辺は大事にしたいところだと思います。

探究の定義、それから非認知能力の評価というのは、確かにいろいろな議論があるので、若干、評価観の話などを少しマイルドな表現にしておいたほうが、余分な議論がなくていいのかなと、確かにおっしゃるとおりだと思います。

それから、研修観自体の話は先生に向けて、そういったところから、今後の方向性についても少し表現等を御検討いただいたほうがいいのではないかとこのところだと思います。

そのほかにいかがでしょうか。多分この場で構成そのものを再構成というのは難しいと思いますので、方向性としてはまず情勢について、課題だけではなくそういったポジティブな部分、今までの良さみたいなものも入れていながら御検討いただき、あとは多様性のところで子どもの権利の話もありました。そういった子どもたちの多様性を包み込むような部分を検討いただくということ、これからの評価等の表現であったり、今後の方向性でもう少し先生にも寄せながら少し検討いただいたらどうかということです。

一応、ここまでいただいた御意見を踏まえ、また事務局で情勢や方向性の部分を御検討いただくという形で、まずこのところはいかがでしょうか。

松本教育政策課長

ありがとうございます。確かに御指摘のとおり、課題や現状、構成の部分にまだまだ甘いところがあるのは否めません。ですから、次回までにそのところを整理させていただ

きたいと思います。荒井先生がおっしゃった、課題なのか現状なのか、それが混在しておりますので、その辺の整理が確かに必要なところはおっしゃるとおりだと思います。

もう少し言葉の整理を次の回までにはさせていただきたいと思います。

村松座長

ありがとうございました。引き続きこの点については御検討いただくということです。

表のもう一つ大きな論点としまして、学校・教員の再定義ということで、今のことも関わってのことでございます。これも今、視点ということで挙げております。多分、様々な御意見があらうかと思っておりますのでいただければと思いますが、いかがでしょうか。

近藤様、いかがでしょうか。

近藤構成員

市町村教委の近藤です。よろしく申し上げます。

感想になって申し訳ありませんが、やはり課題なのか情勢なのかと荒井委員が御指摘されたように、私としては、どちらかという、現在学校が抱えている問題点・課題が書かれているのだと思います。

これからどうアップデートするかということには、四つありますが、一番目や二番目の一律・一斉・一方向性の教育から脱却して、一人一人の多様性を認める学習や学校の在り方へ変えていきたいというのが一番ではないかと思えます。

とりあえず今回のねらいを考えると、学校の教員の再定義では、学校は何をするところかという大きな問題に関わってくると思います。当然、子どもたちの人権や権利も保障された上での学校生活ができるような形に整えていくためには、教員の再定義も必要になってくるのだろうとは思えます。詳しいところは、現在まだ分かりませんが、今後論議を深めていかないと…。

もう一点、市町村教育委員会の立場からですと、今回示されたような形で学校をつくるとしたら、今までの学校という建物が、それだけでは済まなくなってくるのではないかと思います。例えば、思いつきでいけないのですが、老人福祉施設など、いろいろな社会のコミュニティを形成するような施設なども加えていくような環境にしていかないと、一斉・一律ではなく、子どもたち一人一人を認め、他者と対話しながら協働しながら探究していくという学びの場にふさわしくならないのでは…。学校のつくり方も変わってくるのかあと思えます。

村松座長

ありがとうございました。今、御指摘いただいた教育の一律・一斉のような、まさに教育観の転換を大事にしなくてはいけないということと、学校のつくり方自体が変わっていると、まさに再定義に関わってくるころだと思えます。

特別支援教育のお立場から、松嶋様、いかがでしょうか。

松嶋構成員

松嶋です。よろしくお願いたします。

再定義のところから考えたときに、まず学校を再定義するというときに、非常に大きいところで、どこを窓口に定義していくかということもあると思います。ここで言うと、社会から見たときの学校、または教員から見たときに学校をどう考えるのかとか、いろいろな入り口があると感じています。

そのときに、まずは子どもにとって学校はどういう場所なのか、どうあるべきなのかが、一番最初に論じられて、そこがみんなでも共有されて、「そうだよね、学校はやっぱりこういう場所だね」と大前提として理解し合えたところで、それに対して教員はどうすべきなのか、社会はそこにどう関わっていくべきなのかとか、そういう中で学校の定義が明確になっていくのではないかと思います。

まだこれは入り口だと思うので、こういう形で社会に関することも含めて出てきていると思うのですが、今後はそういったところで少し整理してみんなで考えていくのではないかと思います。まずは子どもにとってということから出発できると、学校の意味合いは位置づいていくのではないかと感じています。

それから、教員に関わってのところは、三つポツがあるうちの一番上の探究県であることもキーワードにしながら、やはり共同探究者ということで、私もこの前、共同生活者というお話ししたところですが、子どもと共に学び続ける共同探究者であるという教員の姿というのは、とても共感できるというか、大事なことだと感じています。

あとのところはまた議論しながらだと思うのですが、多様性とか多様という言葉が今いろいろなところで出てきます。多様な職員集団、専門性は必要だと思いますし、ただ、もともと多様な人たちというところがあるので、それをあえて多様な教育職員集団というのはどういうことなのかと考えると、「多様性」とか「多様」というものの捉え方とか、考え方というのは、またみんなでも精査して行って、それをどう受け止めるかはきっと違いがあると思うので、言葉という点ではそういったことをブラッシュアップしていけるのではないかと考えています。

あと、先ほどまでのところに関わってしまうのですが、言葉というところでは、現在の長野県の教育をとりまく環境であるとか、こういう環境をつくっていくということがこれからも出てくるのですが、やはりその環境という言葉の中に含まれるハードの面とソフトの面のところを、環境づくりというところに全体的には含まれてくるけれども、実際に実行するときにどうしていくのかというときには、今後、その環境づくりの在り方みたいなことが出てくると思っています。

具体的などころで言うと、この資料の上の「多様性の時代」のところは、今回通級指導教室の関係で数字が挙げられてきていますが、これがどういう意味合いで数字が出てきたかと思ったときに、こういった配慮が必要な児童生徒が増えてきているという意味合いでこの数字を取ることもできると同時に、逆に通級指導教室が非常に設置が進んできていて、多様な学びの場で連続性のあるところで学べる、そういう環境を整えることに向かっているというポジティブな数字としても捉えることができると思います。

ただ、これを今後の方向性ということにつなげていく意味では、それを支える教員の人材はどうなのかとか、数の面と質の面というところでは、これからの課題に上がってくるところだと思いますが、そういう意味で環境も見ていけるといいのではないかと感じています。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。最初にお話しいただきました誰にとっての学校なのかという定義の主体をどこに置くのかということ、とても大事な御視点かと思えます。子どもが先で、その次に社会にとっての話が来るだろうということで、今の環境についてのお話も御指摘いただきました。

この辺の再定義の部分につきまして、PTAのお立場から松田様、いかがでしょうか。

松田構成員

近藤先生がおっしゃったように、2番目の○の「一律・一斉・一方向型の教育からの脱却」というのは本当に大事だと思っていて、先生方もみんな同じという感じのことがすごく多くて、そこからやりたいけれどもなかなか飛び出したことができないと考えていらっしゃる方がいるかなと、私もいろいろ見ていて思うのですが、子どもたちの自ら考える力というのももちろん育てていく必要がありますが、先生方もやはり自ら考える力を今こそ発揮してもらって、それを子どもたちに見せていくようになると、先生によって違うことがあっていいのではないかと思います。

そして、このデジタル化による新たな学びですが、もちろんデジタル化は今進んでいかなければいけないと思うのですが、ここもデジタルでやっていくところと、アナログのところを実践したり、実験したりするところももちろん大事になってくるので、ここもやはり先生たちが苦手と得意の部分があると思うので、そこも無理してやらないでという方向に中身が行けばいいと思います。

それから、徐々にいろいろなことを変えて、一律・一斉というのはすぐに変えられるものではないと思うので、そこは段階を踏んでいけばいいと思うのですが、やはり教職員の採用や先生方の疲弊など、そういうものはスピード感を持って早く進めていかないと、これが2年、3年続いたら、例えば自分の子どもが中学3年だとしたら、もう高校3年生になってしまうわけですし、子どもは今が大事です。あつという間に時が過ぎてしまって、自分の子どもももう6年だと思ったりするのですが、そういうスピード感を持ってやるものと、徐々に段階を踏んでやっていくものを、具体的に中身をしっかり分かりやすくやってもらおうと、私たちも、これはこういうふうに向かっているんだとか、これは即効性を持ってやるんだと認識できるので、そこはもう少し四つの○の中で具体的に示していただいたほうがいいと思います。

再定義のところは、「再定義」というのも難しいと思って、定義されてもいいのかなという思いもあるので、学校はこうで、教員はこうであるということも大事かもしれないけれども、定義までしてつくっていいのかなという思いはあります。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。最初にいただきました教員の多様なところですが、先ほど松嶋構成員からも「多様な教職員集団」という御指摘をいただきましたが、ここはも

しかしたら多様な専門性とか、そういう意味合いで先生方が協働してということでしょうか。

それから、デジタル化の話と働き方改革のスピード感、要は優先順位をこの中でも濃淡をつけるのかという、そういったお話だったと思います。その辺が確かに示されると、この方向性としては、一番近い取組はここでというものがあると、より分かりやすくなると感じたところでございます。

そのほかにいかがでしょうか。また、再定義そのものという、「再定義」という形で据えるのが適切かという御意見もいただきました。この点も踏まえ、いかがでしょうか。

荒井様、どうぞ。

荒井構成員

一点確認ですが、この資料1や資料2は、最終的に文章化されていくのでしょうか。

松本教育政策課長

本日お示したものは骨組みみたいなものですので、文章化されたものを最終形と考えています。

荒井構成員

それが次回出てくるということですか。

松本教育政策課長

次回、そのような形を出していきたいと考えています。

荒井構成員

分かりました。ありがとうございます。

それを踏まえての発言となりますが、分かりやすさの裏返しとして、使われるフレーズには十分な配慮や工夫が必要なのではないかと思えます。

例えば、「資料1」にある「学校現場や県民の皆様にとし込める」など、「落とし込める」といった表現などは違和感を感じました。

次に、「資料2」に関してですが、ここで記載されているデータは、「問題」というよりは「現象」が記載されています。この「現象」を引き起こしている構造的な課題を明確化することが求められているのではないかと思います。

不登校の数の多寡、生徒数の増減、教職員の多忙化、教員の志願者数の減少、学校の役割の肥大化等がなぜ生じたのか、その原因を特定することは困難かと思えますが、定義付けをすることで、課題に対する解決策の方向性が見えてくると思えます。構造的な課題に対する記載がほとんど見受けられないため、AからBへといったシフトチェンジのロジックが見えにくくなっているのではないかと思います。

以上のことを前提とした場合、構造的な課題として関係者の多くが共有し得ることが、「一律・一斉・一方向型の教育」という部分くらいなのではないかと思えます。そうなりますと、先ほど岩瀬構成員からあったように、子ども観、学習観、評価観、授業観、学校

像も含めた問い直しが必要だという話になってくるのだと思います。

また、先ほど西森構成員がおっしゃられたように、「子どもの権利」を軸としたあり方を模索すべきだという考え方もあるでしょうし、「個別最適な学び」を重視していくべきだという議論もあるかもしれません。さらには、評価のあり方として、幸せや喜びを実感するプロセスを重視する学習観・評価観へ転換していくという方向なども同様のことが言えます。現状の学習観や評価観が何なのかという記載が乏しいため、おそらく構成員の皆さんから分かりにくさの指摘が相次いでいるのではないかと思います。以上です。

村松座長

ありがとうございました。重要な御指摘をありがとうございました。今いただいたように、現象から課題といった分析の部分が明確になっていないのではないかと。多分分かりやすさを優先してどんどんそぎ落としとしていったがゆえに生じたところだと思います。

この辺は、今いただいたお話をそれぞれ踏まえて、再度御検討という形でしょうか。事務局からどうぞ。

松本教育政策課長

荒井先生の最初の御質問・確認に対し、文章でと申し上げましたが、文章のレベルの相違があってはいけないと思って再度御説明させていただきます。

基本的に次の最後のときに御提示させていただきたいというのは、今、荒井先生に御指摘いただいた、やはり少しそぎ落とし過ぎているので、その背景やそういったところの文言の簡略化したことによるそれぞれの皆さんの受け止め方に誤解が生じていることもあると思いますので、その辺りをきちんと表現できるようにさせていただきたいと考えておりますが、冊子のような形で全て文章化をするというところまでは、作業的にそこまでいけるかということもありますので、基本的には今、御提示させていただいた骨組みを肉づけをして、文章化するというところにさせていただきたいと考えておりますので、御理解いただきたいと思います。よろしいでしょうか。

村松座長

ありがとうございました。その方向で御検討いただくということで、先ほどの方向性にもいろいろ御意見いただきましたが、やはり一律・一斉の部分が多分核になるというところからすると、少しここを構造化していただくと、大分整理がしやすいかと。今四つが並列で並んでいるので、先ほどのスピード感の話とか、いろいろな議論も出てきたかと思えます。

それから、再定義も、確かに言葉が難しく、先ほど言われたように、現在はどう定義されているんだみたいな話もありますので、ここもこれからの学校の目指す方向や在り方のような、少しマイルドな形にして出したほうがいいのかも说不定ですね。

ここまでの話を含め、裏側の目指す姿ということで、先ほど既に御意見もいただいておりますが、こここのところに入っていきたいと思えます。先ほど西森構成員からA・B・C案について御意見をいただきました。

これにつきましてどうでしょうか。かなり各所でいろいろな御意見が出たという話は伺



っておりますが、どうでしょうか。

松谷構成員

お願いします。

好きなこと、楽しいと思うこと、興味あることをとことん追求していけることはすごくすてきなことだと思うのですが、まず子どもたちに自分の好きなことをやっていいよ、楽しいことをやっていいよというときに、何人の子が動けるかということです。子どもにとって、自分が好きなことは何か、興味関心は何かを探せる子はそんなに多くないんじゃないかと思います。かえって何をしていたか分からなくなってしまう。

理念としては大事ですが、子どもにとって自分はこれが興味があるんだ、私はこれが好きなんだというところにたどり着くためにどうしたらいいのかを、私たちは現場でとても悩んでいるところです。ですから、これが出たときに、先生たちや子どもたちが逆に悩んでしまうのではないかと。大事なことです、これが前面に出ることに関しては、かえって混乱が起きるのではないかと思いました。

もう一つは、ABC案のところに書かれていることと、真ん中ほどの「目指す姿を実現するためのキーワード」のところに「なぜ、どうして」があるのですが、ABC案とこの部分との整合性がとれているのか、分かりづらいかと思います。

以上です。

村松座長

ありがとうございます。先ほども「とことん」と「出る杭」の話の御意見もいただいたところです。好きなことを探せるお子さん自体が少ないんじゃないか。それぞれもう少しこの辺の表現を検討したほうがいいという御意見かと思います。

関連したところでも結構です。いかがでしょうか。マキナリー様、どうぞ。

マキナリー構成員

確かに「楽しい」や「好き」をとことん追求できる、「じゃあ何が好きなの？」と言われたときに、答えられる子が少ないと思います。それそのものがやはり課題だと思います。好きなことが発見できるように背中を押してあげたり、体験させてあげることが、先ほどの話に戻りますけれども、学校や先生の定義に行くのではないかと思います。

全体的なことで、これを全部読んだときに、何かばらばらしている感じがします。一個一個は納得できるのですが、つながっていない。ミッションもビジョンも、再定義のところは行動指針・バリューだと思っているのですが、それがどうしても一本につながっていない感じがしてしまいます。

それに、対象者が先生になったり子どもになったり、日本になったり県になったりというところもあります。思いがあちこちにあるのでこうなってしまうのだと思いますが、対象はどこなのか、これは誰のために何の目的でつくるのかというところが、まず毎回の会議の中でいつも自分も迷うところです。

今の長野県の中で最大の課題としては、今言った好きなことが見つけられない子どもがいる。これは長野県に限らずだと思うのですが、それを追求していきたいという気持ちを

芽生えさせるのがすごく重要ではないかと思います。

もう一つ、現実的な問題として、こうやって作り込んでいけばいくほど教員の負担になりそうです。私はもっと教師が健全な環境の中で本当に子どもたちの背中を押してあげて、一緒に共同探究者になれるような環境をつくっていくところが常にみんなの頭にあって作り込んでいかないと、思いばかり作り込んでいって、最後に先生が負担になってしまって、「じゃあ、一体私は何をすればいいの？」ということになりそうな気がしてしまいます。

すみません、話があちこちになってしまいましたが、私はとことん追求できることはいと思うのですが、この言葉がもしかしたらプレッシャーになるようでしたら、少し変えていって、とことん追求できるものを探してあげること、それが長野県の教育の中で重要なことで、そのために先生がどうしていったらいいのかというところが、今までの資料2のところを全部上からつながってくるといいなと思いました。

雑駁な意見ですみません。

村松座長

大事なところをありがとうございました。先ほどの定義などの話もありましたが、誰に向けてということ。「個人と社会のWell-beingの実現」というのは、子どもと社会という二つの軸でつくられているかと思うのですが、そこら辺のところを整理をしてみたほうがいいなどの話もありました。

ほかの構成員の皆様はどうでしょうか。ぜひ御意見をいただければと思います。どうぞ、よろしくをお願いします。

小金構成員

今のお話を聞いていて、本当にそうだと思ったので発言をさせていただきます。言葉として今の目指す姿の部分で「とことん」というのは、私も少し怖いと思っていました。正直なところ、怖いなという感じがします。

話を戻してしまうのですが、先ほどのお話につながるのですけれども、やはり教育振興基本計画というものがまず存在するというのを先生方はなかなか知らないのではないかと思います。あることを知っていたとしても、その中身を知る機会を逸しているのか、知ろうとしないのが現状です。

先ほどの再定義にもつながっていくのですが、やはり与えられたものについては、先生たちの中に入っていないのか、「そうなんだ、へえ」という感じで終わってしまうのは困るなど、この立場になって思っています。

じゃあ、どうやったら先生たちの中に入っていけるのか、先生たちが考えるのかというのは、やはり自分たちで一回考えて話し合わないの中に入っていないので、これが出たことがきっかけになって、先生方がこれを話し合う機会を設けたほうがいいと思います。こう県は提案しましたが先生方はどう思いますかという、そういう機会を一回持たないと分かっていけないと思います。

先ほどのお話のとおり、好きなことを発見できるように背中を押すというのが教員の役割だと私も思いますので、再定義をすればそこのかなと。再定義も先ほど出たよ

うに、私も「定義」という言葉は少し拒否感が出てきてしまうので、「あるべき姿」のほうがいいと思います。先生方というのは、生徒や子どもたちに働きかけて、耳を傾けて、その中から何かを引き出してあげるというのが、これからの教員のやるべきことだと思っているのですが、本当に好きなことを発見できるように背中を押すということだと思いません。それが表現の中に入ったらいいいと思います。

あと、思ったほど全体的に探究という言葉がクローズアップされてきていないので、どうせならもう少しクローズアップできるようなところがあると、はっきりと捉えられていいと思いました。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。先生方が子どもたちの背中を押してあげることの大切さの御指摘をいただきました。最後には探究をクローズアップということで、例えば今の「探究」がサブタイトルではなくて、もう少しメインに入れていくことも考えられるかもしれないですね。

それから、Well-being自体がこれからより一般化してくると思うのですが、まだそんなに広まっていないところにはもう少し説明が必要だというお話も伺っております。

そのほかに関係するところでいかがでしょうか。岩瀬様、どうぞ。

岩瀬構成員

僕も大きい方針にはすごく賛成です。Well-beingの実現ということで、私の幸せとあなたの幸せを同時に実現するにはどうしたらいいかを大事にしていこうという方向性、その中で、一人一人が当事者になることを、県として大事にしていこうという提案ですから、大きい方向としては賛成しています。

つまりは一人一人の子どもを主人公にした学びを展開していこうと読み取っています。

その上で、例えば「とことん追求できる」ところに引っかかる人がいることは結構大事だと思っています。抵抗なくするっと入ってくる言葉は今までどおりよいと取られてしまう。一人一人がとことん追求できることを実現するためには、学校はどうあるといいのだろうか、先ほどおっしゃったように、教員は背中を押す存在なんだと、自分たちの定義を変えてみるとか、そういう今までの在り方の問い直しを促すような言葉にする必要があります。

ですから、探究という言葉ここに置くのも賛成ですし、「とことん」という言葉がいいのかはもう少し精査が必要ですが、そういう力強いこれからの転換を促すような言葉には僕は賛成です。

目指す姿を実現するためのキーワードのところ、**「個別最適な学び」と「協働的な学び」**の一体的な充実により、幼児期に芽生えた**「『探究』する心**」をさらに伸ばすという流れになっているのですが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的にすると探究する心が伸びると読めるのですが、果たしてそうなのか。探究する学びを大事にしていたら、結局それが**「個別最適に学び」と「協働的な学び」**を大事にしない限りは、探究的な学びは成立しないというロジックなのか、という点は重要ですので、さらに検討が必

要です。

最後の一つは、先ほど言ったように探究をどう定義するのかということです長野は信州やまほいくがありますから、幼児期の探索期をすごく大事にして、僕の中ではこの時期も「探究」の定義の中に入ると考えています。その探索期から長野でいえば信州総合学習のような探究の学びの実践を培ってきたわけで、そこから高校に至っていく探究、そういうものを包括した「探究」を定義ができるのか分からないですが、もう少し「探究」が何を指しているのか深めたいと思います。そうすることで教科を探究的にすればいいんだぐらいで取るのか、もっと教科を横断したPBL的なアプローチを僕らは指向していくんだと現場に届くのかは違ってくると思ったので、その辺を考えたいと思います。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。今、一番議論になっている「目指す姿」そのものが、多くの皆さんがずっと行けるような、ある意味マイルドな形で行くか、一定の角度をつけて少し変革を促せるようなものを目指していくのか、これはかなり大きな選択のところかと思えます。また、探究の話とキーワードの御意見もいただきました。

関連していかがでしょうか。ここをぜひもう少し御意見いただければと思います。マキナリー様、どうぞ。

マキナリー構成員

私も個人的にはすごく角度のある言葉が好きなので、「とことん」とか「出る杭」とかもものすごく好きなのですが、実際それに対して先生たちや保護者の方たちがプレッシャーがあるようなら、先ほど5か年計画で毎年計画を立てていくというところで、「とことん」や「出る杭」という言葉が受け入れられるような目標を持ってやっていくところがいいのではないかと思います。

前のところに置いていくのは、スタートはいいかもしれないですが、もっと角度の高いものをゴールに添えていって、そこに5か年計画で持っていくというところがいいと思いました。

それで、「個人と社会のWell-beingの実現」というのはすごくいいと思います。多分先生たちは、もし子どもたちにWell-beingの実現のためには何をやらなければならないのかというところがなかなか分からなくて、探究という言葉も、本当に先生によって解釈が違っているとんでもない方向に行ってしまうって自由な学習みたいな、子どもたちが何も発展せず、わーとなってしまうということもあり得るので、先ほど先生の研修会の話があったのですが、研修会では、長野県は探究県を目指しているのだから必ず研究会では先生が探究についてディスカッションしようとか、そういうところを1項目入れてもいいのではないかと思います。

先生に自分たちが話し合っただけで納得してもらうことが一番で、教育の成功というか、ゴールにヒットできるかどうかは、とにかく私は先生がキーだと思います。ですから、先生たちがどうしたら納得してやる気を起こして、どう関わられるかというところで、探究を目指していくのなら、先生たち自らが探究とは何だと思おうかをディスカッションするような研

修会を県として要望していった、そちらの方向へ持っていくことが重要だと思いました。  
以上です。

村松座長

ありがとうございました。角度づけも段階を踏んでやっていったらどうかということ、それから、今の先生方の研修等、先ほども先生方の啓発等のお話もありましたが、この辺についての具体的な手だて等も御提案いただきました。

関係したところでどうでしょうか。松嶋様、どうぞ。

松嶋構成員

お願いします。

今、マキナリー構成員からお話があったことは私も本当に共感するところです。まず、三つ御提示いただいたA案からC案のところ、この言葉の持つインパクトとといいますか、メッセージ性からいくとA案とC案は非常に伝わってくるものといいますか、そういうものは自分もあると感じていましたので、この中で言うとB案がどうかというところへ行ってしまうました。

その中で先ほどもお話の出た、例えば「出る杭」という表現・言葉をどう受け止めるかですが、一般的に才能として非常に突出している部分やプラスの面で受け取っていくというと、これから世の中が、先ほど出た多様性をどう考えていくか、「出る杭」を県民がどう考えるかというときに、プラスの面で受け取る方と、でも、学校現場の中ではいろいろな姿で、時に個別的に特別な配慮が必要になるお子さんもいたりという面で、個性が出ているものも「出る杭」ということで受け止めていくとすれば、その子にとっては当たり前なことであり普通のことである姿を誰が「出る杭」と名づけるのか。

そうなったときに、「出る杭」をみんながプラスの面で、時に周りから見るとマイナスに見えてしまう面でも、それはそうじゃないんだよと、平たく考えて良सानだよと取れるならば、こういう言葉も生きてくると思うのですが、そこに一定には使えるけれども、そうじゃないと非常に誤解を招いてしまう言葉なのかなと、今の現状がこの言葉をどう受け入れられるのかと感じました。

それから、Well-beingについて、とても分かりやすいし、大事なところで、これがキーワードになってくると思うのですが、例えば私たちも、当然教職員も当時の社会の面からWell-beingはこう考えるということは、みんな多分頭でしっかり理解できると思います。ただ、本当に先ほどもお話があったように、これをどう実際に現場で何をしていくことがそれにつながるのかということの議論や話し合い、それから研修という言葉も出ましたが、とても大事だと思っています。

当事者意識というところにもありますように、これを感じられるようにならないときっと変わっていかないと思います。そこをどう仕掛けていくのかというのは、今回の議論から離れるかもしれませんが、今後その部分が出てくることで、実際に実行に移るか言葉で終わってしまうかの差になってくると思います。

村松座長

ありがとうございました。今の中心的になる「出る杭」の話の多様性をどう許容してそれを支えていくのかというニュアンスやそういった形が出ると、今いただいた御意見に合う形になっていくと感じたところであります。

西森構成員、どうぞ。

#### 西森構成員

先ほどはグループの子どものことをお話しさせていただいたのですが、先生方がおっしゃったように、言われたときに好きなことが分からない、できる子が少ないんじゃないかというお話もありましたが、それが一律・一斉・一方向の教育を脱却しなければいけないということにあると思うのですが、それをしてきたツケが来ているんじゃないかという気がします。

今はグループに来ている不登校の中学生が、何をしたいか分からないというのでいろいろ話をしていたときに、「自分のためにやりたい勉強をしているんじゃないの？」と聞いたら、「いや、私は先生がやれと言うから、先生のために勉強をしていた」と言う。それくらいの子までいます。そういう子どもたちの現状をきちんと考えなければいけないと思います。そういうのはグループに来ている子どもたちが、これしなさい、あれしなさいではなく、一切そういうものを取り除いて、自分で好きなことをしているうちに、自分で考えるようになります。自分で次の一步を考えるようになると、いろいろできるようになってきます。

今、子どもを育てなければいけないではなくて、子どもは勝手に育っていくものだという意識から入っていかないと、大人が余計なお世話をしていることで余計子どもたちを苦しめているのではないかと思うので、ここはもっと力を抜いた、子どもたちの現在を許容しながら楽しくやっていけるんだよというものがつくるといい気がします。

そして、公教育とは一体何だろうということがはっきりしていないと思います。ただ勉強をしに行くという意味で捉えられているのですが、公教育は前回のときに岩瀬先生がおっしゃっていたかもしれませんが、障害があろうが何だろうが、どんな子だって来て楽しく過ごしていける場所であるべきなのが、こんなに苦しい子が出ていることを、本当に考えて、それをこの再定義に入れていくのがいい気がします。

#### 村松座長

ありがとうございました。今お話しいただいたところは、先ほどの「出る杭」の話ではないですが、いろいろな多様な子どもたちに対して今まで十分そういう子たちの背中を押してあげられなかったけれども、やはり子どもたちの背中を押しつつ、こういう方向に向けていきたいということ、もう少しマイルドに進めていければと。

ただ、方向としては、多様な子どもたちが活躍できる、それがまさに個人とか社会のWell-beingの在り方だと思うので、多分多くの皆さんが言われているのは、方向観としては重なっているのかなと思いました。

あと、そういった細かい表現等、今いただいた御意見を踏まえて少し事務局でも調整いただければと思います。

どうぞ。

#### 安藤構成員

安藤ですが、よろしくお願いします。

今、村松先生のほうで方向性を出されたことに共感を持ちますが、今回、この長野県教育というのは、幼稚園・保育園世代から小学校・中学校・高校世代のところをターゲットに向けていくことでよろしいでしょうか。

そうしたときに、個人と社会のWell-beingという言葉も、どの学校種においてもやはり通じていけるような配慮がうんと必要だと思います。

そういう意味で、例えばABC案にしても、最終的に目指す姿ということでは理解できるのですが、幼稚園・保育園世代の先生たちにしても、学校という立場を受け止められるような配慮があってほしいと思います。それがマイルドにつながるのか分かりませんが、例えばB案であれば、一人一人の「好き」や「楽しい」を追求するものを見つける、恐らくこういう部分はキーワードの中に、幼児期に芽生えた探究心などにもつながるような言葉で「好き」や「楽しい」を見つけて追求できるとか、そうすればターゲット全世代への配慮といえますか、受け取りやすさはあると思います。

単なる例ですので、私が感じているのは、最終的に文章化されて資料1の形の左側のものができあがってくればきっと現れてくるであろうけれども、全体を通して幼稚園・保育園世代から小学校、中学校、高校という全部を網羅した視点は、ぜひ強く持っていたきたいと思います。

以上です。

#### 村松座長

ありがとうございました。もう一度見直す際に各学校段階からぜひ再検討いただきたいということで、この辺はお願いできればと思います。

では、近藤先生、よろしくお願いします。

#### 近藤構成員

お願いします。

Well-being はいいじゃないかということには私も賛成です。が、多分県民の皆さん方が今度は違うなと感じるのは、一番C案だなと個人的には感じます。ただ、「出る杭」だけではなく「埋もれている杭」もということまで言葉として広めておいた方が良いのではないのかなと…。

先ほどの資料1に関して、現状と課題に対して何をしていくかということには、まずWell-beingを実現しますよといったときに、その次の重点施策のところですが、真っ先に「一人一人が自分にとっての『Well-being』を実現できる学校をつくる」という目標の一つ目とされ、その次の「一人の子どもも取り残されない『多様性を包み込む』学びの環境をつくる」で、先ほどの視点の真っ先にやるのが重なってしまっている気がします。

ですから、先ほどから出ているお話からすると、こだわるわけではないですが、一斉・一律の授業から学校から脱却するには、個別最適化する教育課程や探求学習を柱とする学校のあり方に変えていくという意味合いの部分があるといいと思います。

そして、こういう具体的な施策が出てきた中で、今回の計画で言いますと、毎年少しずつ重点施策と課題を変えていくということで、いろいろな方向や課題はその都度少しずつ変わってくると思いますので、そこで施策を毎年やっていって、最終的にWell-beingへ行けばいいだろうなということで、全体的にはこの流れで賛成です。

村松座長

ありがとうございました。どちらかというところ、下の施策の方向性というよりは目指す姿にかなり近いところで、先ほど言われたのは、一斉からの脱却についてはむしろ重点施策などに置くのがいいのではないかと。この辺の整合性はぜひ御検討いただければと思います。

事務局のほうで今いただいたお話を踏まえて、また再度御検討いただくということでしょうか。

どうぞ。

荒井構成員

改めての質問ですが、「個人と社会のWell-beingの実現」というフレーズと、ABC案の関係はどう捉えればよろしいでしょうか。副題としてABC案があるという位置付けでしょうか。

松本教育政策課長

今、先生がおっしゃったとおり、副題と考えています。

荒井構成員

ありがとうございます。

村松座長

大きな方向性としては個人と社会のWell-beingだけれども、それを教育の文脈で具体的に説明すると、こういう副題になるということですね。適切な副題をまた御検討いただければということをお願いします。

この辺はまた御意見もあるかもしれませんので、最後にあればお願いいたします。

それでは、時間も限られておりますので、続きまして次の計画指標の在り方についての意見交換に移りたいと思います。

事務局から御説明をよろしくお願いいたします。

松本教育政策課長

それでは、資料3と資料4の御説明を簡単にさせていただきます。資料3につきましては、事前の意見交換の場でも御説明させていただいているので、簡単に確認ということで御説明します。

次期の計画では、目指すべき姿を「個人と社会のWell-being」の実現と、今お話しいただいているとおりですが、そうしたいと考えているところです。その達成度合いをより実



態的に把握し、毎年の施策形成や見直しに効果的に反映させていくことを見据えて、Well-beingを測定できる指標を、次期の計画には設定していけたらと考えています。

参考までに、内閣府が示している二つの視点の中ほどに記載をしております。主観的指標というのが生活満足度、自己肯定感など、被調査者の主観に基づく指標です。そして、客観的指標は文化芸術活動への参加率など、定量的な指標と内閣府でも示しています。

2のところですが、現在、第3次の長野県教育振興基本計画の中でも主観の指標や客観的な指標はそれぞれ定義をさせていただいており、国でもそういうものがあります。また、おめくりいただきまして、これが中央教育審議会の教育振興基本計画の部会の中で京都大学の内田先生がお示しをしている、生徒のWell-beingの構成要素、学校のWell-beingの構成要素の例や、下のところですが、島根県では高校魅力化評価システムということで、民間企業と連携をしながら、こういったものを作成しています。

また、次のページで群馬県と岩手県のほうで、県の中での最上位計画である5か年計画の中でこういったWell-beingの指標のような、主観的指標と客観的指標を用いている例をそれぞれ採用している例が散見されます。

教育基本計画の中でこのような指標を出してくるというのは、なかなか今の段階では私も把握していないところですが、第4次の教育振興基本計画の中では、こういうものも採用していったらどうかと考えています。

続いて、資料4ですが、令和4年度「長野県教育委員会の事務の管理及び執行状況の点検及び評価」についてということで、今の指標の部分につきまして、3次の中ではこのような形で県が点検評価をしているところです。これは、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づく点検評価という位置づけになっておりますので、こういったものは毎年度やっていかなければいけないという中で、報告書の1ページの1をおめくりいただきたいと思います。

本計画とは第3次のことですが、本計画に掲げた三つの基本目標の進捗状況です。当初設定しているのが45の生活指標で、こちらに何ページかにわたって基本目標ごとに幾つか設定をされています。それを直近の実績値を基に、「順調」であるか、「おおむね順調」であるか、「努力を要する」か、この3段階で評価を行っている状況です。

今回の進捗状況の概要は、こちらの（2）に記載させていただいております。本日は時間の関係で詳細の説明は省略させていただきますが、有識者懇談会メンバーである北條構成員と荒井構成員には、代表して規定に基づく有識者からの御意見を伺っております。それが、この報告書の一番最後のほうにある5-1に記載をさせていただいておりますので、また御覧いただければと思います。

説明は以上です。よろしく願いいたします。

村松座長

ありがとうございました。資料3、4の内容に関連しまして、本日配付にはなっていないのですが、岩瀬様から御説明いただけるということですので、岩瀬様、お願いできますでしょうか。

岩瀬構成員

僕は評価指標などは専門ではないので、情報提供ぐらいですが、軽井沢風越学園では、初年度から子どもに後述する尺度で縦断的に追いかけていくことをやっています。それは、神戸大学の発達心理学の赤木和重先生との共同研究で尺度をつくりました。

いわゆる主観的指標ですが、風越では一人一人が自由になることと、お互いの自由を相互に承認できることを大事にしています。これを基に尺度をつくったので、Well-beingにもある程度重なり合うのではないかと思い、紹介します。

大きいところとしては、自尊感情と自己肯定感の尺度です。それから、いわゆる学習コンピテンスに関する尺度、協同学習に対するモチベーションの尺度、自由と自由の相互承認に関する尺度等です。

現在、2回が終わったところですが、これを見ると、やはり学校自身のうまくいっていることと課題が明らかになってくるので、参考になるところがあるかもしれませんので、何らかの形で情報提供できればと思っております。

もう一つは、この尺度をつくる上で、杉並区の尺度も参考にしました。杉並区はかなり細かい尺度をつくって、これも小1から中3までずっと経年で追って行って、個人ごとの変化、学校としての変化、学区域の変化みたいなことも追いかけているので、これもなかなか参考になると思います。多分調べてくると出てくると思うので、参照されたらどうかと思います。

以上です。

村松座長

ありがとうございました。岩瀬構成員、もし差し支えなければ、後日、構成員の皆様へ項目等、可能な範囲で共有いただけると議論が深まっていきたいと思います。よろしく願いいたします。

ここまでのお話に関わり、北條様、取れますでしょうか。北條様から御覧いただきまして、御意見等をいただければと思いますが。

北條構成員

よろしく申し上げます。

先ほどの資料2の話とも少し関連してくるかもしれないですが、基本的にこのWell-beingの主に主観的な指標といいますか、尺度といったものをこれから長野県でも継続してデータを収集していくという方向に関しては、私も大いに賛同したいと思いますし、どういう指標・尺度を採っていくかという点については、今ほどお話がありました様々な参考になる例もありますので、できるだけオリジナルのものというよりは、これまで学問的にも実際にも使われてきたものを踏まえて、信頼性のあるといいますか、そういった尺度をこれから長野県でもデータを取って、つくって検証していくという方向性は、非常にいい方向性ではないかと考えています。

その上ですみません、少し話が戻ってしまうかもしれないのですが、Well-beingに関連する指標を採っていくというときに、先ほど資料2のところに「個人と社会のWell-beingの実現」ということで、Well-beingとは、個人にとってのWell-being、社会にとってのWell-beingという説明書きが1行入っているのですが、これについてももう少し慎重な書きぶ

りが必要ではないかと考えます。

これもかなり人によってという言い方は悪いかもしれませんが、いろいろ捉え方があって、例えば個人にとってのWell-beingの最後のところで、「自分らしく自分が生きたいように生きる」とありますが、これをWell-beingの定義の中に本当に入れていいのかというところは、議論になるところだと思います。

今ほど、資料3で提示されていて、内田先生も御指摘されていましたが、Well-beingと日本でも英語で普及しているように、もともと西洋というか、ヨーロッパやアメリカのほうで進展・発展してきた概念で、やはりあちらの社会の価値観が色濃く反映されたものです。自分らしく自分が生きたいように生きるなんて、まさにその部分が色濃く出ていると思うのですが、果たしてそれがこの日本で同じようにこれが子どもたちのWell-beingを決定づけるというか、影響する重要な要素になるかと言われると、そこは少し考えたほうがいいのではないかと思います。

実際、例えば子どもたちを対象にした国際比較の調査の結果などを見ると、いわゆるヨーロッパやアメリカ的なWell-beingの指標を採ると、どうしても東アジアの国々は尺度が低く出てしまいます。その結果を見て、日本の生徒はWell-beingが低いみたいな話になってしまったりするのですが、それは多分このWell-beingの定義があちら寄りだからといいですか、この国の子どもたちのWell-beingを適切に反映しないような尺度を採ってしまっているからという観点の話も進んできていますので、尺度を採るときに、一概に外国で使っているような尺度を採るのではなく、この国の子どもたちのWell-beingを適切に反映できるような尺度を採れるように、少し私のほうでも考えてみたいと思っております。

以上です。長くなりまして申し訳ありません。

#### 村松座長

ありがとうございました。大変重要な御指摘をいただきました。Well-beingそのものが目指す方向が、定義の問題はもちろんあるのですが、これでいいのかということです。また、海外等のお話もいただきましたが、特に日本の子どもは自己肯定感が低いとよく言われますが、海外との文化的な背景みたいなものも考えなければいけないという、大事な御指摘だったかと思えます。

同じように調査を見ていただきました荒井様はどうでしょうか。何か補足いただければと思いますが。

#### 荒井構成員

北條構成員がおっしゃられた通りですが、指標を導入際はぜひ検討いただきたい点があります。

一つ目は、計画と指標を連動させる必要があると思いますので、「個人と社会のWell-being」と3案の関係を整合的なものにしていく必要があると思います。

二つ目は、現在国レベルでも同様の議論がなされていますので、ぜひその議論もキャッチアップしていただくと全国レベルのデータとの比較可能性の余地が出てくると思います。

三つ目は、指標の種類に関してですが、指標といっても、例えば、「評価指標」と「活動指標」というものがありますので、どのスパンでどのような指標の測定を行っていくの

かもぜひ御検討いただけたらと思っております。以上です。

村松座長

ありがとうございました。計画と指標とのリンクですね。測定する以上、ここは非常に大事な観点かと私も思います。

それから、全国との比較や調査スパンの話等をいただきました。この辺はぜひこの指標を具体化して、実際にこの評価を行っていく上で御検討いただければと思います。

関連したところでどうでしょうか。この評価に関わりまして御意見、御質問等ございましたら。

マキナリー様、どうぞ。

マキナリー構成員

長野県の目指す姿のゴールが決まってくると指標も自然に決まってくると思います。先生がおっしゃったように、オリジナルのものも研究されて世に出ているよい指標もあると思いますので、そういうものを検証しながら、ゴールにひもづいたものをつくっていくことは大賛成です。

それと、今は課題の一つとして、幼稚園から高校・大学という、高等教育がぶつ切りになっている気がしています。先ほど安藤先生がおっしゃっていたと思いますが、ゴールとしては全体で長野県が目指す。けれども、そこに幼児教育、初等教育、中等、高等というように、マイルストーンを持ったゴールを設定していくのも重要ではないかと私は思います。

一気にゴールは達成できないし、年齢別の発達段階もあると思いますので、段階別にして、長野県として高校卒業時にこうなるという「マザープラン」を持つ。じゃあ、幼児教育のときにはどんな姿なのか、それが指標になって、小学校でもどう分けるか、小学校という一くくりだと1年と6年では全然違うので、低学年と高学年に分けるとかになるのか、そこら辺はまた議論していかなければいけないと思います。

でも、その指標を採りっ放しになるのではないかというのが一つ不安です。もったいない。だから、長野県として一人ずつの子どもにポートフォリオをつくるのがいいのではないかと思います。これは結構大変な作業だと思いますが、それをやってこそ、一人も取りこぼさない、出るくいも埋もれたくいもみんな応援している。担任の先生が代わったら、指標や評価とか、その子の見方が変わってしまったのではなく、小さいころから、その子のポートフォリオを持って中学校に行ったり、高校に行ったりして、先生がそれを共有して見られる。

また、先生だけではなく、先ほども先生が専門家でもないのにカウンセリングをやったり大変だというお話しがあったので、それをポートフォリオを見ながらその子の成長を先生と一緒に考えてくださるスクールカウンセラーのような、メンタルヘルスのカウンセラーのような人が各学校に、各学校だと大変かもしれませんが、地域にいるような形をつくっていくようにしていったら、一人ずつがとても大切に育てられていく長野県という感じがします。

ですから、この指標は大賛成なのですが、つくることやチェックすることが目的になら

ずに、これをどう生かしていくかをものすごく議論していく。そこで手間がかかっても、予算も工数もかけるべきところの気がします。

村松座長

ありがとうございました。指標をどう有効に活用していくのか、それから発達段階に合わせたゴール設定といたしますか、目指すことをやっていくこと。また、今のポートフォリオですが、この辺は具体的な施策の話になってしまうのですが、考えられるとしたら、例えばDXではないですけれども、デジタルでこういうものの蓄積ができるようにいろいろ進んでいますので、そういう中の一つに検討してもよろしいのではないかと思います。

では、どうぞ。

西森構成員

すみません。この指標について、例えば平均を出したりすることになると、後にもどこかの県で標準以上の児童生徒の割合を出しているところもあるのですが、それが一人一人を大切にすると言いながら、矛盾が出てくるのではないかという心配がありまして、一つ疑問に思うところです。

もう一つは、前のところですが、インクルーシブ教育についてはこのどこに入ってくるのか。言葉としては全然出てきていないのですが、今すごく問題になっているところだと思います。これをきちんと位置づけて、ただインクルーシブと言っても、教室へ障害のある子をぽんと入れればそれで済みではなく、本当に立て直していかないといけないところがあると思うのですが、それをしっかり研究する場所を設けて、きちんとやっていかないといけないんだということを入れてほしいと思いました。

村松座長

ありがとうございました。また、インクルーシブの話は教育施策の中でぜひ御検討をお願いいたします。

指標の話で大事な点を御指摘いただきました。例えば学力テストなどでも、ただの平均の比較みたいなもので順位などもやるのですが、本来はそれぞれの学力の状況を把握して、その教育の改善に資するという、指標の結果だけが独り歩きしないような御配慮かと取らせていただきます。これは大事なことだと思います。どういう指標を採るかと同時に、それをどう使っていくのかについても、また検討を深めていただければと思います。

それでは申し訳ございません。時間もそろそろ終わりになってまいりましたので、ここまでとさせていただきます。そのほか御意見等があります場合には、事務局へ直接お寄せいただき、次回の議論までに生かさせていければと思います。

### （3）その他

村松座長

最後に、資料5で示させていただきましたが、これまでにいただいたいろいろな意見をおまとめいただいたものであります。今後見ていただいて、もし過不足等、あるいはもっとうしたらみたいな御意見がありましたら、また同じく事務局へお寄せいただければと

思います。よろしくお願いいたします。

それでは、今日本当にまさに多様ないろいろな御意見や本質的な御意見をいただきまして、司会をしている私自身もなるほどと考えさせられる点が多々あったと思います。今日出していただきました御意見はまた事務局でも整理いただきまして、次回はよいよ最後のおまとめの回になります。そこに向けての準備を進めていただければと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、司会を事務局へお返しいたします。

上平企画幹

村松座長、ありがとうございました。

閉会に当たり、教育長の内堀から御礼を申し上げます。

内堀教育長

構成員の皆様、長時間にわたりまして様々な角度からの御意見をいただき、本当にありがとうございました。

お聞きしながら一つ一つになるほどなと思ったり、ごもつとも思ったりしながら聞いておりました。これをどうまとめるかは非常に大きな課題ではありますが、何とか次回までに皆さんからいただいた御意見を反映しながら、いい提案ができればいいと考えているところです。

そういった中で3点ほど、時間もありませんので手短かに申し上げたいと思います。

一つは、好きなことややりたいこと、あるいは夢といったものもそうかもしれませんが、それについて様々な御意見をいただいたのですが、その議論はつまるところ、子ども観ということなのかなと思って伺っていました。子どもをどう捉えていくのか。現状はどうであるかということに加え、子どもは本来どういう存在であるのかという捉えの問題ではないだろうかと思ったところが一点です。

2点目は、学校の再定義ということも話題になっておりました。再定義と言うのなら、今の定義はどうなんだという御指摘もありましたが、再定義という言い方がいいのか、むしろ、こういう考え方でこうまとめたものを実現していくために、学校や教員はどういう方向に行ったらいいのかという考えを示すということなのかなと。定義したものをもう一回定義し直すというよりは、そのように捉えていけば、皆さんのおっしゃっていることがまとめられるかなと思ったところです。

Well-beingについても御指摘をいただきましたが、この内田先生のおっしゃっていることですが、北條先生がおっしゃったとおりで、Well-beingというものを西洋的個人主義的な価値観で捉えていくのが、本当に日本のWell-beingの指標の在り方として正しいかという問題はあると思います。内田先生の資料にもありましたが、個人としてだけでなく、日本人はどうしても指向的かというと、向かう方向的にほかの人との関係において、自分のWell-beingを考える傾向があるところが指摘されておりますので、Well-beingの指標をどんなものにしていくのがいいのかということも検討の余地があると思ったところです。ほかにもたくさんあるのですが、しゃべっていると講演会のように長くなってしまいますので、3点にとどめさせていただきます。

これからの長野県教育を考える有識者懇談会（第4回）  
（令和4年9月14日）

改めまして、いろいろな角度からいろいろな御指摘をいただきましたので、参考にさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

上平企画幹

事務局から御連絡を申し上げます。

次回の日程につきましては、10月下旬に開催したいと考えております。場所は長野県庁を予定しております。詳細な日程調整は、改めて御連絡させていただきます。

連絡事項は以上でございます。

#### 4 閉 会

上平企画幹

有識者の皆様、本日は大変ありがとうございました。

（了）